

先進校に学ぶキャリア教育の実践

30歳になった卒業生のレポートが物語る 総合学科で身についた「切り拓く力」

— 大分・県立 ひ た み く ま 日田三隈高校 —

「教育の成果は10年後20年後でないとわからない」という声をよく聞くが、
実際に10年経って評価を行う例はどれだけあるだろうか。
大分県初の総合学科、日田三隈高校は、30歳になった卒業生の「今」を集める取り組みを始めた。
紆余曲折しながら前向きに生きる卒業生の姿からは、同校で培った力の大きさが垣間見える。

取材・文／藤崎雅子

実践のKeyword

🔍産業社会と人間 🔍総合的な学習の時間 🔍社会人インタビュー
🔍インターンシップ 🔍課題研究 🔍ライフプラン作成 🔍追指導 🔍科目選択

17年間変わらず大切にしている 総合学科設立時の理念

大分県立日田三隈高校は、1996年に従来の普通科、商業科、家庭科を再編して誕生した、大分県初の総合学科高校である。同校の幅広い科目選択の指導・支援体制や、日々の活動を体系化したキャリア教育システムなどは、総合学科の先進例として全国から注目されてきた。本誌のNo.15(2006年)でも、生徒の夢実現をサポートする学校事例として紹介している。

同校が総合学科になって17年間。周囲に多様な総合学科が増えるなか、同校の方向性について校内でもさまざまな議論がなされたが、一貫して変わらぬ理念を基本に据えてきた。教頭の渡邊一朗先生はこう話す。

「私たちが目指すのは社会の変化に対応し、生涯にわたって学習する意欲を持ち、自主的に自己の進路を選択していける能力を育てること。そして、主体的に判断し、行動できる人間を育てることです。だから、自分の好きなことや興味のあることを伸ばし、将来につながる科目を自分で選択するという、総合学科本来のあり方を大切にしています」

一方で、具体的な実践内容や手法は、本誌で紹介した7年前からも進化を遂げている。今回はそんな同校の、不易流行を探る。

主体性を重視した キャリア教育プログラム

まずは、同校教育の柱といえる、キャリア教育「MIKUMA PAS SYSTEM」(以下PAS)を俯瞰しておこう(図1)。First Stageと位置つけた30歳時点での充実したキャリアを目標に据え、それに向けた高校生活の1年次をFirst Stage、2年次をSecond Stage、3年次をThird Stageと設定。主に「産業社会と人間」(1年次)と「総合的な学習の時間」(2、3年次)を活用して、段階的なキャリア教育を展開している。改編から7年めで実践内容を整理して体系化し、その後の改訂を経て現在のかたちになったという。

具体的な内容をみると、1年次は2、3年生の先輩や卒業生、職業人などさまざまな人から高校生活の過ごし方や卒業後のキャリアについて考える機会が多く設けられている(図2)。なかでも大きな活動は、各自が将来なりたい職業に就いている人や生き方・考え方に関心のある人にインタビューを行う「この人に学ぶ」だ。生徒自身が対象者を選んで、自分で依頼文書を書き、アポイントメントの電話をかける。そして、インタビュー内容は報告書にまとめ、クラスおよび学年全体で発表会を開いて共有する。

2年次には全員がインターンシップに参加。「この人に学ぶ」同様、生徒自身が事業所の選定、アポイントメント、事前訪問、履歴書作成を行う。「ゼロから自分ででき



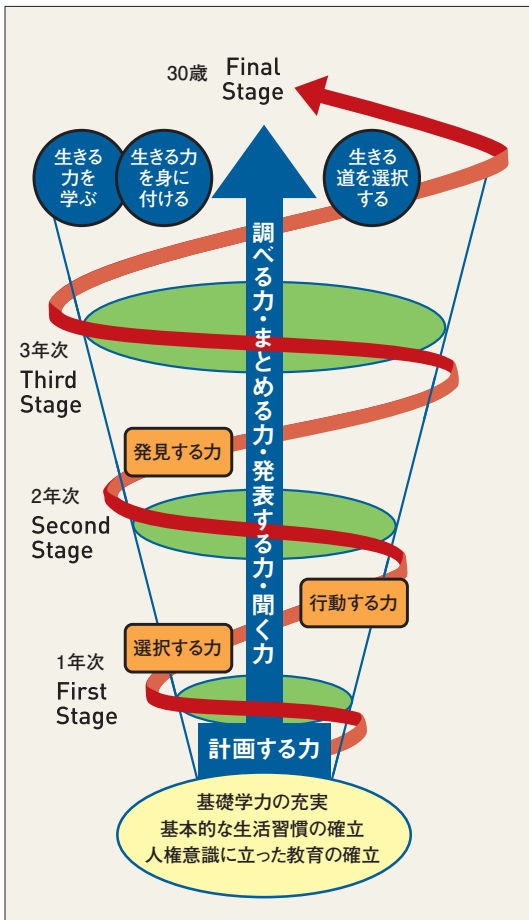
School Data

普通科 / 1964年創立
 生徒数 464人(男子121人・女子343人)
 進路状況(2012年度実績) 大学8.9%・短大17.7%
 専門学校44.9%・就職28.5%
 大分県日田市大字友田1546-1
 TEL 0973-23-3130
 URL <http://kou.oita-ed.jp/hitamikuma/>

Outline

1996年に普通科、商業科、家政科を改編し、大分県初の総合学科高校となる。人文社会、自然科学、ビジネス情報、ビジネス経済、生活科学の5系列約120科目を設置し、各生徒が自由に自主的に科目選択できるよう指導を行っている。また、「産業社会と人間」「総合的な学習の時間」を中心とした系統的なキャリア教育「MIKUMA PAS SYSTEM」を展開。追指導として、卒業後に30歳時点でのレポート提出を課している。

図1 MIKUMA PAS SYSTEMの概念図



「4つの力」の育成だ。これは、改編以来掲げてきた「調べる力」「まとめる力」

計画、調査、まとめ、発表、聞くを繰り返し「4つの力」をつける

一連のPASで強く意識されているのは、

「調べる力・まとめる力・発表する力・聞く力」を育て、3年間で「4つの力」を身に付ける。今年度はその過程でインターンシップをはじめとするフィールドワークを奨励しており、7割程度が校外での体験活動を研究に生かしているという。

「発表する力」「聞く力」の4つに、3年前に「計画する力」を加えたもの。単に知識を得るのではなく、こうした力を使って知識

「4つの力」の重要性は生徒にも伝えられ、PAS各活動の自己評価と相互評価でこれらの力をどれだけ発揮できたかを各自がチェックする。経験を積んだ同

「4つの力」の育成を目指している。

も調べたことを発表する要素を取り入れ、3年間繰り返し行うことにより「4つの力」の育成を目指している。自分のものとするという手順で行われる。これをPASの中だけでなく、授業でも調べたことを発表する要素を取り入れ、3年間繰り返し行うことにより「4つの力」の育成を目指している。

図2 MIKUMA PAS SYSTEMの主な取り組み

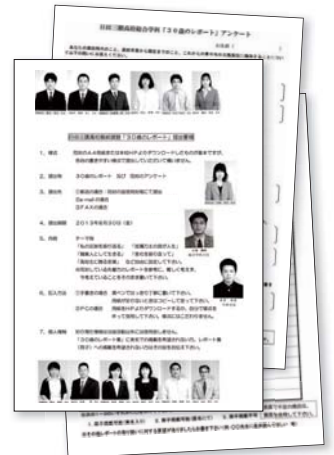
段階	1年次【First Stage】	2年次【Second Stage】	3年次【Third Stage】	30歳【Final Stage】
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> 自己の適性と職業の特性を学ぶ 進路目標を設定し、2・3年次の科目を選択する 	<ul style="list-style-type: none"> 自分や社会の課題を知り、さまざまな角度から社会を見つめる 自分の考えをわかりやすく表現する 課題解決に向けて、積極的に行動する 	<ul style="list-style-type: none"> 自らの進路・興味関心に応じて設定したテーマに沿って、ゼミ単位で課題を解決する これまで身につけた能力を生かしてフィールドワークを行う 	<ul style="list-style-type: none"> 自らの人生を振り返り、これから進むべき道を明らかにする
主な内容	産業社会と人間 ○進路学習 ○上級学校見学 ○科目選択 ○「この人に学ぶ」 ○「先輩に学ぶ」 ○「卒業生に学ぶ」 ○ライフプラン	総合学習【PAS Second】 ○自己理解の深化 ○「夏の活動」(インターンシップ) ○ブレ【PAS Third】(課題研究) ○進路目標の確認 ○ライフプランの見直し	総合学習【PAS Third】 ○「課題研究」 →「研究報告書」「卒業論文」作成 ○ライフプランの見直し	【PAS Final】 ○「30歳のレポート」提出・発表

と評判が良いという。

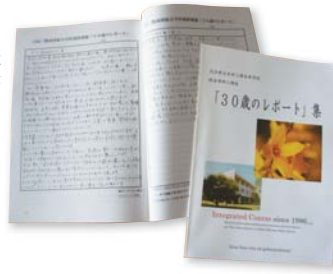
修正を前提に繰り返し行う
科目選択とライフプラン作成
 PASでもう一つ注目したいのは、「科目選択」や「ライフプラン」が、一度取り組んで終わりでない点だ。

ダウンロード可

図3 「30歳のレポート」依頼書類



30歳になった卒業生に送付する「30歳のレポート」の提出依頼書類。当時の担任等の写真も掲載



集まった「30歳のレポート」をまとめた冊子は、提出のなかった卒業生も含めて全員に送られる

まず、同校が「総合学科の命」と呼ぶ科目選択。同校には約120の選択科目があるが、コースや類型は設けておらず、生徒が興味・関心に応じて主体的に自由な選ぶことを重視している。その理由について、教務主任の小柳文代先生はこう語る。

「本校に入学する生徒は必ずしも勉強好きではありません。そんな生徒でも、目標を持たせて意欲を引き出そうというのが、本校の科目選択。『自分でこれを選んだ』という思いがあれば多少難しくても投げださずに頑張れます。だからこそ主体性を重視して選択させ、教員はなるべく多くの希望を生かすよう何カ月もかけて時間を組んでいます」

初回となる1年次の科目選択指導は、特にていねいに行われる。生徒自身が自分のやりたい勉強について考えるのはもちろん、保護者、先輩、4人以上の教員と相談したうえで希望を提出。その際、翌年度分だけでなく、残りの全高校生活を見通して2年次と3年次の2年間分の選択をしている。ただし、3年次の選択科目は2年次段階で変更も可能だ。

「間違えたと思ったら修正すればいい。で

も、最初からうまくいったほうがいいよね、だからしっかり調べて慎重に考えようね」と話しています(小柳先生)

また、各年次の年度末に生徒は「ライフプラン」作成に取り組み。これは、残りの高校時代および卒業後の生涯までを見通し、長期的な目標を持たせるもの。以前は1年次に一度作成するだけだったが、今は2、3年次にも1年間学んだことをふまえ、前年度のプランを見直すようにしている。1年次は「海外に行つてトップデザイナーになる」「〇億円の家を建てる」など夢見がちでプランが多いが、2年次、3年次と進むにつれ具体的・現実的なプランになっていくという。

「計画どおりにいかなくて当たり前。そこで、なぜ計画どおりにいかないのか、しっかりと考え、計画を見直せることが大事ではないでしょうか(渡邊教頭)

最終課題「30歳のレポート」で同校教育を評価

ここまで高校在学中の取り組みをみてきたが、PASで最もユニークなのは「30歳のレポート」の課題を設定している点だろう。これは改編当初から計画されており、1期生が30歳となった09年度から開始。今年度で4回めとなる。

「本校の総合学科教育の目標が達成されたかどうかは、高校卒業時点ではわかりません。では、いつの時点でどう判断するの

か。当時のスタッフが討議を重ねた結論が『30歳のレポート』です。評価と同時に、順調な卒業生には拍手を送り、苦しんでいる卒業生には何らかの支援をする機会として考案されました(渡邊教頭)

30歳になった卒業生に提出要領の手紙一式を送付(図3)。現在の状況についてのレポートと、高校時代の学びと現在の関連についてのアンケートの提出を依頼している。提出されたレポートはA(Achieving Group)・同校キャリア教育を卒業)・P(Progressing Group)・善戦健闘中)・苦悶中)・I(Improving Group)・支援が必要)で評価を行い、当時の担任等からの激励メッセージとともに本人に戻す。必要があれば状況や要請に応じて同校教員が支援を行うが、そのほとんどがAかPの評価だ。また、集まったレポートは「30歳のレポート」集として1冊にまとめ、年度末の総合学科公開発表会と同時開催される30歳のレポート発表会にて、代表者が在校生を前に発表を行う。

10年以上経って卒業生に連絡をとるのは容易ではない。初回の09年度、1期生の担任だったことから「30歳のレポート」実行委員を務めた小柳先生は、作業負担の大きさから、最初はこの取り組みに否定的な気持ちもあったという。しかし、教員からのレポートで印象は一変した。

「最初提出があるか半信半疑でした。それが、高校時代は何をするのも最後だった生徒から、いち早くレポートが戻ったのです。そうした反応で苦勞が帳消しにな

りました。立派な内容でなくても、戻ってきたことに意義を感じます(小柳先生)

アンケート結果をみると、同校総合学科で学んだことへの「満足」は9割近い。特に「科目選択」や「4つの力」への満足度は高く、同校が力を入れてきたことは10年以上経っても卒業生の中にあるようだ。

挫折しても前へ進む卒業生の姿が在校生・教員の自信と刺激に

「30歳のレポート」からは、高校卒業後の十数年間のさまざまな人生がみえてくる。転職や目標の変更、挫折や失敗も少なくない。しかし、それをステップアップの機会にしている卒業生の多さに、「お腹を空かせた者に食べ物を与えるのではなく、食べ物の採り方を教えたい(渡邊教頭)」という同校の卒業生としての強さを見る。

昨年度発表を行った3期生の女性Aさんは、ホテル業界か航空業界の仕事を目指していたが、就職難で就職が決まらないまま短大を卒業。派遣社員として販売の仕事をしていて、もう一度チャレンジしようとして23歳でアルバイトとしてホテルに入った。間もなく嘱託社員になり、憧れだったフロントサービスのベル係として充実した毎日を送っている。

また、高校時代に簿記を学んだ男性Bさんは、税理士の専門学校を卒業後、スムーズに税理士事務所就職した。しかし、業務の難しさと多忙さから、約1年で離職。地元に戻って水道工事の会社に再就



総合学科主任
伊東奈緒先生



教務主任
小柳文代先生



教頭
渡邊一朗先生

Voice

「3期生30歳の
レポート発表会」に
対する生徒の感想



発表をする3期生

- 日田三隈高校で学んだこと「4つの力+1」が30歳になった今でも生かされていることがよくわかりました。今、私たちが産社を受けていることは決して無駄にならないことがわかって良かったです。(1年)
- 3人の先輩方の話を聞いて、どの人たちも一度は失敗しているけど、諦めないことが大切だと言っていました。心に響く言葉をたくさんいただきました。その中でも、「自分を大切に。自分の可能性を信じて。今がどんなに辛くても大丈夫。いつかは強さ変わる」。この言葉を聞き、自分の夢を諦めず一生懸命頑張ろうと思いました。(2年)
- いい職業に就くよりも、自分のしたことを後悔せず、30歳になりたいです。あと、気配りができ、自分に自信を持つ人になりたいです。(2年)
- 「人生は一度しかないから自分のしたいことをする」。3期生のみなさんは、いろいろな挫折を味わいながらも、自分を信じ、現在は幸せに暮らしていると言っていました。私は自分の進路について悩んでいるので、「自分がしたいこと」をするのがいいという話を聞き、オープンキャンパスに行ったり、進路指導室で自分にあった学校について調べたりしようと思いました。(2年)
- レポートを胸を張って書ける、自分で何かをして、それをみんなに伝えられるようになりたい。(3年)

職した矢先、シングルファーザーとなり、男手ひとつで子育てをすることに。がむしゃらに努力した結果、20代のうちに会社役員になり、マイホームも建てた。今はさらなる高みを目指して頑張っている。

「失敗を重ねてこまできたという卒業生もいますが、生徒には途中で投げ出さない強さをみせたい。だから発表者には、あえて紆余曲折のあった卒業生を含め、多様なパターンの発表者を選んでいきます」(小柳先生)

30歳のレポートの発表を聞いた在校生の感想をみると、将来に生きる「4つの力」の重要性を感じ取り、挫折しても前に進む先輩の姿に勇気づけられている様子がわかる。「自分も30歳になったらあの舞台で発表するんだ」と意気込む生徒が少なくない。卒業生からは「もっと勉強しておけばよかった」「資格を取っておけばよかった」といった反省もあるが、それも在校生

には良い刺激だ。当初、「30歳のレポート」の目的は、総合学科教育の検証と卒業生へのエールだった。しかし、実際に実施してみると、在校生や教職員も得るものも多く、期待以上の効果があったという。

課題はレポートの回収率だ。提出がない卒業生ほど、実は支援を必要としている可能性もある。例年のレポート回収率は十数%。今年度から「e-book」の活用を始めたところ、例年以上のペースで戻ってきている。今後、卒業生の発表を聞いて意識付けされた生徒たちからは高い回収率が見込まれる。それまでの残り数年間は、こうしたツールを駆使しながら回収率アップに努めていくという。

**取り組みに込められた魂は
日常から引き継いでいく**

社会環境や入学生徒は常に変化し、教

員も入れ替わるなか、素晴らしい取り組みが年月を経て形骸化していく例は多い。同校が17年間、全国の総合学科をリードする存在として走り続けてきたのは、現状を見据えて柔軟な改善を重ねてきたからと考えられる。

育成目標は、改編以来掲げている「4つの力」を補うため、状況に応じて追加される(現在は「選択する力」「行動する力」「発見する力」を追加)。具体策の内容や手法は、前年どおりに流されることなく、毎年ブラッシュアップ。近年でいえばインターシッピングのセルフ・プロデュース化、ライフプランの毎年度実施、「30歳のレポート」発表会開催…、ほかにも細かい改善をあげればきりが無い。

改善を担っているのは、1人のスーパー先生「の力ではなく、教員一人ひとりでだ。」「前年度の経験者は、反省をふまえてより良い手法を提案します。一方で新しく同校に着任した教員は、「本校の生徒はここまでしかできない」という固定観念にとらわれない意見を述べ、新しい風を吹き込んでくれます。両者それぞれが意見を出し、生徒の実態に合うよう取り組み内容を柔軟に変えています」(伊東先生)

教員の組織体制は2年に1回は見直される。分掌のチームには若い教員が多く、意欲的に取り組む姿が周囲に及ぼす影響は大きい。生徒の多様な進路希望や科目選択に対応するための業務は複雑だが、だからこそ引き継ぎを重要視。データ、プリント、メモ書きも含めて、翌年度へ引き

継がれていく。

ただし、「形や手法だけでなく魂も受け継がれていかないと意味がない」と渡邊教頭。他校からよく「どれだけ教員研修をしているか」と聞かれるそうだが、研修は年度初めの1回程度。カギは、日常にあるという。

「テーマごとに『産社』会議や『Pass Second』会議など話し合う場が毎週あり、ほとんどの教員は何かしらに出ています。そうした日常から、教科で取り組むべきアイデアがあがって各科目の授業に反映されたり、教員間の共通理解が進んでいくのだと思います」(渡邊教頭)

●

現在の課題は、生徒の夢を、夢で終わらせないために基礎学力アップに向けて努力させるか。その対策として、今年度から放課後に10分間の「学習タイム」を設置。芸術科目や保健体育も含めた全教科の教員がプリントを自作し、「学習タイム」と家庭で取り組ませている。部活動の時間が削られるため、当初は教員の反対意見も多かった。しかし、「学習タイム」運営に奔走する教員の姿に触発され、徐々に全体の方向性がそろって来たという。

「『前年どおり』を続けていたら、今の日田三隈高校はなかったと思う」と伊東先生。今後、も次々と新たな課題があがり、生徒も変化していくことが予想されるが、議論を重ねて対応していく方針の同校。そこから、困難にもくじけず進む力をつけた生徒が単立していくことが期待される。